

老健

2024. 7

ROKEN



公益社団法人 全国老人保健施設協会



緊急特集

令和6年能登半島地震 老健施設の復旧に向けて

Close Up 老健 介護老人保健施設シェモア鶴見(大分県)

この人に聞きたい 老健へ一言 古元重和さん 厚生労働省老健局 老人保健課長

Close Up **老健**

介護老人保健施設シェモア鶴見

大分県別府市

地域に発信を続け 利用者からも職員からも選ばれる老健施設に

大分県の東海岸中央部に位置する別府市は、源泉数と湧出量が日本一を誇り、古くから湯治場として知られる湯けむりのまちだ。8世紀の初めに編纂された「伊予国風土記」には少彦名命すくなひこなのみことの命を救った温泉として登場、さらに鎌倉時代には負傷した武士のために療養所がつくられたという記録も残っている。別府八湯と呼ばれる泉質の異なる温泉郷を巡るツアーも人気で、外国人観光客も訪れる人気の観光地でもある。

市の東側の海岸線を除いて3方向が山に囲まれており、鶴見岳などの活火山もある。

その麓に位置する老健施設「シェモア鶴見」(大分県厚生農業協同組合連合会。財前博文施設長。入所：50名、通所：40名)を4月末に取材した。



施設外観

結核療養所から総合病院へ 併設型老健施設として地域にコミット

古くから温泉観光地として繁栄してきた別府市は、現在も観光・サービス業をはじめとする第三次産業の盛んなまちだ。バブル期以降、一時衰退していたが、近年では隣の由布市の由布院温泉とともに再び脚光を浴びている。コロナ禍の苦境を乗り越え、外国からの観光客も戻り、新たな観光地として生まれ変わろうとしている。

市内の公民館には公共浴場が設置され、朝晩入浴を楽しむ地元の高齢者の姿が多く見られる。同市は今年で市政施行100周年を迎え、温泉効果を取り入れた認知症対策の構築など、温泉と健康を結びつけるプロジェクトを進めている。

瀬戸内式気候で、年間の平均気温は16度と温暖で過ごしやすのが特徴だ。竹細工、湯の花、ザボン漬けなどが特産品で、市内には、別府八湯、地獄めぐり、昭和レトロの面影を残すアミューズメントパークの別府ラクテンチ、別府タワー、大分マリンパレス水族館「うみたまご」、城島高原パークなどの観光地が点在する。

活火山である鶴見岳をはじめ由布岳、大平山（扇山）の連山が美しくそびえ、森林も多く自然にも恵まれている。

市の人口は11万2,625人（2024年4月30日現在）と県内で大分市に次いで2番目に多く、65歳以上の高齢化率は34.9%と高い（2020年度）。

1947年の農業協同組合法の施行により、老健施設「シェモア鶴見」の母体である大分県厚生農業協同組合連合会が150床を備える結核患者の療養施設を設立、「大分県農民療養所」としてスタートした。その後、



財前施設長

一般病院をめざし、1957年「大分県厚生連鶴見病院」に改称。

「病院開設当時、この地は人里離れた山のなかで、空気もよく、療養に適した場所であったと聞いています」と話す財前施設長は、長年医師として鶴見病院の循環器内科に勤務、現在は鶴見病院の副院長を務め、2024年に「シェモア鶴見」の施設長に就任した。

「シェモア鶴見」は1995年に鶴見病院併設の老健施設として開設した。当初は病院と同一の敷地で運営されていたが、2008年に病院の増改築計画のもと、通りを隔てた位置に移転した。

「急性期の治療を終えた患者さんが、ご自宅・特養などの施設・慢性期病院に移る前の、文字どおりの中間施設をつくりたいと、『シェモア鶴見』を開設しました」（財前施設長）。

老健施設開設当初より管理医師を務める大河原均副施設長はこう振り返る。

「開設時、特養に近い形でスタートしましたが、2018



①国指定の名勝である「別府の地獄」は、独特で多様な色彩や形態のもとに湧出し、観賞にも学術的にも価値の高い泉源として人気を呼ぶ。左から「海地獄」「血の池地獄」「鬼石坊主地獄」。②別府八湯の1つである明礬（みょうばん）温泉の「湯の花小屋」。江戸時代は明礬の採取地であったが、現在は湯の花が名産。③1879年開館の「竹瓦温泉」。現在の建物は1938年のもので唐破風造（からはふづくり）の豪華な屋根が特徴。



大河原副施設長



二宮事務長



支援相談員の渡邊さん



介護支援専門員の阿部さん

年には加算型に移行。2023年には在宅強化型となり、現在は老健施設の本来の機能を発揮できるように大きく変わりました。リハビリを強化したことで、入所の方の表情も生き生きとしてきました。在宅復帰に向けて皆で尽力しています」。

大河原副施設長指導のもと、介護職のスキルアップかくたんに取り組み、現在では喀痰吸引も日常的な業務となっている。入所者の医療的ニーズは多岐にわたるが、大河原副施設長が病院搬送には及ばないと判断した場合は、研修を積み重ねた介護職が適切なケアや処置に対応できるようになった。

介護サービスとの関係づくりに尽力 利用者の「できること」を引き出す介護を

入所者の特徴について、二宮洋平事務長に尋ねた。

「この地域の特性として、観光に携わる自営業の方や、県外から移住してきた方も多くいます。高齢化が進み、独居で身寄りが近くにいない方もいらっしゃいます。古いまち並みの一角には昔ながらのアパートが結構あり、そこに住んでいた方や、リゾートマンションに住み定年後の余生を温泉地で過ごそうと移住してきた方など、家庭環境はさまざまです」。

支援相談員の渡邊久之さんは、入退所をコーディネートする立場として次のように話す。

「市内では住宅型有料老人ホームがかなり増加傾向にあり、ご利用者がそちらを希望するケースもありますが、当施設からの在宅復帰先として連携することも多く、うまく共存関係を築いています。また、退所後の連携先としてデイサービスや訪問介護など在宅系サービス事業所も多いので挨拶回りは欠かせません。通所リハビリから入所につながる方も結構いらっしゃいますので、サービス担当者会議にも積極的に参加して、居宅のケアマネジャーさんとよい関係を築き、施設の特徴をアピールし、実際に居宅介護支援事業所に繰り返し出向くようにしています。在宅強化型を維持し続けることが私の通知表だと思っています」。

さらに介護支援専門員の阿部ルミさんは、「有料老人ホームには、看護師が24時間常駐しているところがあるため、病院から直接有料老人ホームに入所する方が増えました。また、最近は特養に空きが出ることも多くなり、老健施設を退所する方がすぐに特養に入所できるケースが増えました」と補足する。

「その分、当施設には医療ニーズの高い方、認知症で介護度の高い方が入所されることが増えていますので、職員への負担も増していることが気になります」と



①1957年、日本で3番目に建てられた高さ100mのテレビ塔、別府タワー。別府のシンボルとして親しまれる。②「別府市竹細工伝統産業会館」。経済産業大臣指定伝統的工芸品に指定された別府竹細工を紹介する。③95周年を迎える「別府ラクテンチ」。傾斜30度の急勾配を登るケーブルカーや日本唯一の二重式観覧車など有名。④地元の食材が並ぶ別府駅に隣接した「べっぷ駅市場」。毎週金曜日に「金の市」を開催。



介護福祉士の小野リーダー



看護師の小野主任



作業療法士の西尾主任



管理栄養士の亀井さん

二宮事務長は懸念する。

負担があるなかでも職員が重要視していることを阿部さんが話す。「入所当日のご利用者は精神面が不安定ですので、少しでも安心していただけるように、1日寄り添って過ごしています。またコロナ禍以降、現在もご家族の面会には制限があるため、タブレットでご利用者の動画を見ていただきこまめに様子を伝えるなど、信頼関係を構築できるよう対応しています」。

介護福祉士の小野雄太リーダーは若手のホープで、生活期リハビリへの意気込みを次のように話す。

「認知症の進み具合によって、なかには対応が大変な方もいらっしゃいます。認知症について改めて学び直したく、今年度もリーダー研修に参加するなど勉強を積み重ねていくつもりです。また、ご利用者の『できること』を最大限に引き出すケアを心がけています。特に私たち介護職が行う生活期リハビリは重要です。トイレや食事、車いすの自走など、日常生活でできることはなるべく自分で行っていただき、身体機能の維持向上を図っています」。

看護師の小野久未子主任もこう続ける。

「自立支援的アプローチでの生活期リハビリは開設当初より行われていて、制度改正と並行して新しいアプローチを取り入れ、それが当たり前のように職員に定着

しています」。

身体と心を整える場所として 安全に快適に過ごしてもらうために

同施設での直近（2024年3月）の在宅復帰・在宅療養支援等指標は70ポイント。在宅復帰の根幹を担うリハビリを担当する作業療法士の西尾智子主任は話す。

「老健施設は病院と家の間の中間施設で、身体と心を整える場所だと思っています。在宅復帰先として自宅を選ばれる方、特養の方、有料老人ホームの方とさまざまですが、生活する場所が変わっても安全に動作が行える環境づくりや身体の動かし方、手順を伝えられるように気を配っています」。

利用者によって異なる残存機能に合わせてベッドの高さの調節や車いすの種類を選定をていねいにサポートするほか、居室の床に歩行器を置く位置をテープで示す工夫や、転倒予防につながる動線を確保するなど、取り組みは他職種とていねいに共有する。

また、あえてリハビリマシンを使わず、利用者の在宅環境に即した動作訓練を重んじている。職員も利用者も生活リハビリへの意識は高い。

さらに入所生活の場で重要なのが食事だ。食べる楽



①新しく導入したカラオケ画面を利用したのリハビリ体操。好みの曲がかかると利用者の反応もよい。②自慢のメニュー。左が世界のランチでスペイン風オムレツ・パエリア・にんにくスープなど。右は11月のお誕生会の食事。③昼食時に多職種チームがミールラウンドを実施。





看護師の伊東科長



介護福祉士の星野主任



理学療法士の脇屋さん

しみを創出する役割を担う管理栄養士の亀井英美さんは、昨年度は世界の料理、今年度は日本の郷土料理をランチメニューにとり入れ、毎月の誕生会や季節の行事食にも力を入れる。

「栄養ケア計画を立てるとき、3か月に1回、必ず一人ひとりに食べたいものを尋ね、その意見をメニューに反映しています。月に1回開かれる入所の方との意見交換会では食事に関するヒアリングもします」(亀井さん)。

同施設では口腔・嚥下機能の評価は看護職やリハビリ専門職をはじめ多職種で行い、管理栄養士もこれに加わる。また、協力歯科医療機関の歯科衛生士から、口腔ケアや評価について助言を受けている。

看護師の伊東麻弓科長は、施設内の職種間連携についてこう話す。

「介護職のスキルが高いので、ちょっとしたご利用者の異変にも気づいて看護師に報告します。急変時には看護師が状態を確認して病院に搬送すべきか施設で様子を見るかを大河原副施設長に相談します」。

「夜間帯もバイタルの確認を念入りにしてくれますので安心です」と小野主任は続ける。

通所リハビリは現在30名前後で稼働率は約75%だ。28年間当施設に介護福祉士として勤務し現在は通所リハビリ担当の星野哲人主任は話す。「開設当初よりご利用

者同士の交流を重視しています。最近では脳トレや麻雀などをとり入れ工夫しています」。会話をしながら、在宅で何に困っているかをくみとり、独居で孤独を抱える人には気分転換できる居場所となる雰囲気づくりを心がける。

同じく通所リハビリ担当で理学療法士の脇屋裕文さんは、「通所は元気な方が多いので安全管理、特に送迎時やサービス時間でのつまずきや転倒に気を付けています。今後は歩行の速度やバランス、移動能力も含め評価できるスケールをつくっていきたいです」と話す。

循環器内科の医師として、大分県心不全包括ケアカンファレンスを立ち上げた財前施設長は、「適切なケアと処置を前提に、急性期での治療を終えた心不全の方を老健施設で受け入れることも可能ではないかと模索中です」と話す。

「今後の課題は、リハビリ専門職をはじめとする人材確保と育成、経営の安定化です。50床という小規模でのベッド稼働率と在宅復帰率のバランスをうまくとりながら、老健施設としての機能を高めて経営につなげていければと思います。当施設独自の特色を生み出して地域に発信し、ご利用者からも職員からも選ばれる老健施設に成長していきたいですね」。

二宮事務長は老健施設としての未来をこう見据えた。



①利用者に評判のいい入所スペースの浴場。近隣の堀田温泉から温泉水を引いている。②居室には環境整備の一環として移動式の手すりも備えつけられ、歩行器の位置と安全な動線を示すテープが貼られている。③広くゆったりとした通所リハビリのスペースでくつろぐ利用者たち。